

# ●モノグラフ小学生ナウ



働くお母さん

Vol.2-7

© 1982 (株)福武書店 教育研究所/加藤智福・真川雅子・阿部悦子  
東京学芸大学助教授 深谷和子

## 目次

特集／働く母親をめぐって	2
調査レポート／働くお母さん	
要約と提言	8
1. 働くお母さん—その実像	10
● いつ出かけていつ帰るのか	11
● 母親がいない時の気持ち	13
2. 働く母親のイメージ	15
● 母親の働く姿を見たことは	15
● 母親の仕事のイメージ	16
● 何のために働くか	19
● 家庭にいる時の母親	20
● 父親の協力ぶり	22
3. 母親に望んでいること	24
● 仕事をやめてほしいか	24
● 仕事を持ってほしいか	27
● 将来自分(相手)はどうしたいか	27
● 働く母親に望むこと	30
● まとめに代えて	32
シリーズ／子ども考現学	
子どもの姿・昔と今(5)運動会	33
資料1・調査票見本	38
資料2・学年・性別集計表	47

## 特集 ●

# 働く母親をめぐるって

東京学芸大学助教授 深谷和子



筆者の周辺には、たくさん女子学生や女性研究者(のタマゴ)たちがいる。皆優秀で、まじめで、熱心に勉強や研究に打ち込んでいる。そうした女子学生たちの多くは、大学に入学した時から同級生の男子学生たちより、抜群により成績で入学して来て、そのまま熱心に勉強をつづけるのだから、男子学生たちはたまったものではない。他の大学ではともかく、筆者の所属する東京学芸大学では、心なしか男子学生たちの方が遠慮っぽく教室の隅に座ってゼミや授業を受け、女子学生たち

が、ドーンと真ん中に座ってイキイキとノートをとっている、といった情景がそこら中で展開されている。

### ハシカと出産

話はやや変わるが、大学の教師というものは、自分の持っているテーマについての研究をすることの楽しみの外に、よい学生を育て、きちんとした職業人として社会で活躍していけるように教育する、という楽しみもあるこ

とが、教師になって初めてわかってきた。だから、毎年新しく研究室に入って来る人びとや、新しくゼミを開いてフレッシュマンと出逢う時の喜びは格別なものがある。どの学生をどう育てようか、という無意識の心の動きが出てきてしまう。

ところがここに一つの問題がある。男子学生や男子の大学院生の場合は、きちんと育てて社会に送り出せば、後は職業人としてひとりで成長し発展していつてくれるのだから、楽しみに折々の再会を待つことができる。ところが女子学生の場合は違うのである。

「結婚・出産」という関門をとった後でなければ、その道が定まらない。

昔、「ハシカは命定め」ということわざがあったそうである。子どもの死亡率の高かった時代は、一人ひとりの子どもに七・五・三を無事に祝ってやることができるかどうか、親にとっては大変な課題だっただろう。そしてそれを越えるには「ハシカ」という関所を無事生きて通れるかどうか、大きな鍵だったのであろう。現代の女子学生たちを見ていると、このことわざを思い出す。職業人として使いものになるかどうかは、「結婚・出産」という「命定め」の門をくぐった後でなければ、見極められない。しかもこの「命定め」は、昔の「ハシカ」以上に、なかなか厳しい関所なのである。

そう思うと、目の前に優秀で熱心な女子学生や院生を見ている、ふと心弱くなることしばしばである。「命定め」の門を通らなければ、どうなるかわからない人たちに指導をし教育をするよりも、今は多少チャランポランなところがあっても、男子学生を育てた方

が、ずっと効率がよいことになる。なにしろ大学の場合、教官1人で手がけられる学生は数人か、多くても10人どまりでしかない。ある程度、手塩にかけた——と言えるくらいめんどうを見てやって、時には個人的な影響力も持てる者の人数は限られてくるから、それなら、できれば数年後に「命定め」の門などをくぐらずにやっていつてくれる男子学生を、と思ってしまうのは、仕方のないことかもしれない。女性である筆者がそうなのだから、男性の教官は、一層そう思いたくなるのではないであろうか。

## 専業主婦こそ最近のかたち

このような優秀な女性たちの職業的達成を挫折させてしまう「結婚・出産」は、よく考えてみると結婚そのもの、出産そのものではなくて、ワーキング・マザーの下での子育ての





問題なのであろう。しかし考えてみると、昔から女性たちはずっと働きつづけてきたはずなのである。つまり農漁業にせよ、製造業にしろ、商店の経営にしろ、たいていの職業は、むしろ共働きがふつうだったはずである。女性史研究者によると「主婦」と言う言葉が使われ始めたのは、まだごく最近のことで、やっと大正時代に入ってからだそうである。つまり俸給生活者、サラリーマンという職種が生まれて、女性は家業の手伝いから解放され、主に家事をやっていたらよいという身分が生まれてきたのだと言う。そしてその後、サラリーマン形態の職種がとくに都市で増えてきたため「主婦」が妻の一般的イメージになってしまったのであろう。

そう考えると、歴史的に考えれば、ワーキング・マザーは、最近の問題ではないことになる。違ってきたのは家を離れて働く母親が、

現代的なワーキング・マザーである点であらう。つまり母親の物理的不在の下での育児の問題ということになる。

もし母親不在でも幼い子どもたちが、心身共に健やかに育つ保証があれば、多くの女性たちにとって「結婚・出産」は、職業人としての「命定め」とはなりえないであらう。しかし子どもが小さければ小さいほど、母親は一人でこの問題に直面させられる。心理学者はむしろんのこと、医師も先輩の母親たちも、この点については何一つ言ってくれないのだ。つまり、働く母親がどうすれば質のよい育児を成し遂げられるか、その裏づけとなるデータを誰も提供してくれないのである。

## データで見る女性の一生

さてここで、現代の女性たちの働いている



様子を、データによって追って見ることにしよう。

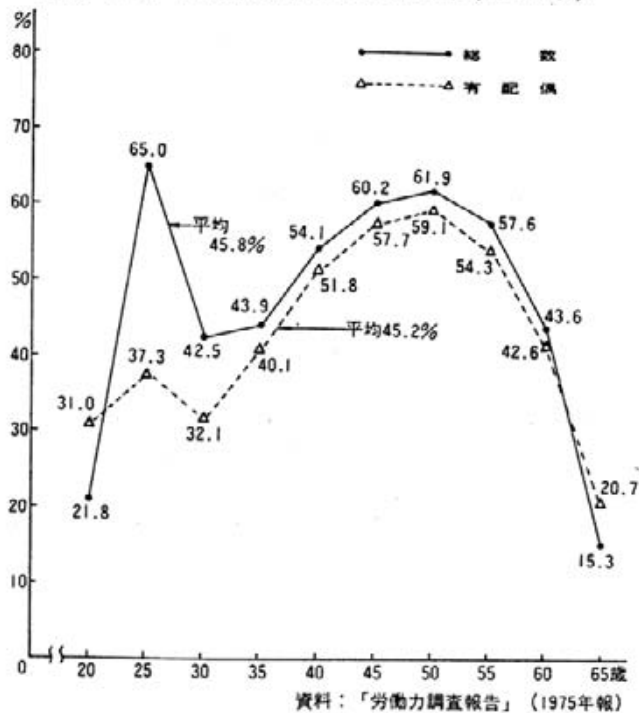
図Aは「労働力調査報告」からの引用データだが、女性の一生と労働との関わりを示したものである。

まず総数(——)で見てみよう。女性の一生で、一番働いている者が多いのは、図に示されているように25歳頃。65%ぐらいの女性が何らかの仕事を持っている。その後グラフは下降する。結婚、出産、育児にたずさわる女性が増えてくるからであろう。しかし30歳前後を底辺にして、一度仕事をやめていた女性たちは、その後再び職に就き始める。45歳から50歳の間に第2のピークがやってくる。60%を超える女性が仕事に就いている様子がわかる。その後また就労率は徐々に減っていく。しかし65歳を過ぎててもまだ15%は働いている勘定である。こうして見ていくと、女性の一生とは、ある意味で仕事を持って働く一生だという気がしてくる。

今見てきたのは、女性全体についてであった。では働く母親の割合はどうか。図は残念ながら配偶者のある女性の数字しか出ていないが、これらは一部の者を除いて、ほぼワーキング・マザーと見て差支えなさそうである。

図が示すように、30歳を少し越えたあたりで、ワーキング・マザーは40%にも達し、その後ゆっくり上昇し、45歳から50歳の間に、

図A 女子の配偶関係別労働力率(1975年)



その割合は6割近くにもなる。

この数字を見ていると、母親が働くことは現代においても、われわれの一般通念以上に、日常的な現象であることがわかってくる。むしろ現代では、専業であることの方が、例外的な姿だと言ってもいいのかもしれない。とすると、われわれは、母親が働くことにある種のこだわりを持ち過ぎているのかもしれない。かなりの割合の母親が働いていて、かなりの子どもたちは、けっこう心身共に健やかに育っているのではないか。とすれば、われわれは、働く母親という状況が子どもにも与えるマイナスの影響について、危惧し過ぎるのかもしれないのである。



## 働くのは能力の証し

このことと関連して思い出すエピソードがある。昨年末に筆者はサンフランシスコを訪れる機会があった。その折に訪ねたある小学校での先生たちと歓談の中で、話はたまたま働く母親の問題になり、筆者は日本の女子学生たちが、出産と子育てに直面した場合、職業の継続が不可能になることを強く危惧していること、それがともすれば、職業選択に際して、腰かけ就職の道を選ばせること、また実際に多くの女性の職業人が、母親になると同時に退職し、不本意ながら専業主婦として家庭内にとどまることになること、などの現状に触れたのである。その時、その場の人びとから一斉に出た言葉は、次のようなものだった。

「ナンセンス。ナンセンスという言葉はこういう時に使うためにあるようなものですよ。アメリカでは、職業を持つことは、社会がその人に、仕事をまかせることのできる能力の持ち主、とタイコ判を押しているようなものです。だからこちらでは、ご主人が医者や弁護士でも、つまり奥さんが経済的にも社会的にもめぐまれた状態にあっても、なおかつ働きます。働いていない人はこちらでは、小さくなっています。能力のないことの証し、社会が必要としていない人間、ということになってしまうからです。」

働く女性に関するこのような見方は、日本の場合に必ずしもそのままあてはめられないような部分も一部はある。つまり年功序列と家族主義が支配的なわが国では、一度就職すれば、よほどのミスでもしない限り、クビにはならず、仕事の継続は、必ずしもその人に



能力のあることの証しにはならない。それにひきかえ生存競争が激しく、能力主義の国アメリカでは、常に有能であることを周囲に認めさせなければ、仕事の継続は難しくなる。

しかしそうした事情は差し引いても、やはり、「仕事を持つことは、社会にその能力を評価されていることの証しなのだ。」という積極的な考え方を、われわれはもっと自分たちのものにしていってもよいのではないだろうか。もしかしたらそうした積極性を持ってイキイキと仕事に臨むことが、かえって家族の者たちにもよい結果をもたらすかもしれないとさえ思うのだ。そしてそれがまた、母親自身に仕事や家事、育児への張りを生み出し、あらゆる問題をよい方向に解決していく知恵と力とを与えることになるかもしれないという気がする。

## データのつみ重ねに向かって

しかしここでもう一つ忘れてはならないこ

とがある。この問題について、子どもたちへの視点の設定である。つまり子どもたちの持つ、年齢や能力や性格などの個人的条件への対応であろう。多くの育児行動が、こうした個人差への対応を中心に行われているように、母親の就業もまた同じ配慮のもとに、評価がされるべきであろう。そしてそれらは、単に発達の一般論や、心情的で個人的な態度に基づいて行われるべきではなくて、心理学的、社会学的、教育学的なあらゆる立場からのアプローチによる客観的なデータからなされるべきだと考える。

そうした意味を持つデータは、まだまだ少ない。今後そうした面から、この問題に対するアプローチがなされれば、生涯にわたって仕事を持ちつづけたいと願っている女性たちには大きな力となるであろう。そうすれば、女性(小学生から大学生に至るまで)の教育にあたる教師たちも、「命定め」の関所などに思わすらうことなく、安心して教育に当たることもできるであろう。



## 要約

### ① 子どもが登校してから

本サンプルの中で専業主婦はわずかに44%だが、働いている母親で、子どもが目覚める前に出勤してしまうのはわずか9%。おそらく母親不在のマイナスを最小にするために、職種の選定などが配慮されているのだろう。(図1・図2)



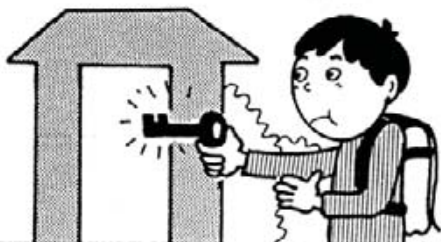
### ② 子どもが帰宅してから

と言っても、帰宅の時間の調節まではできないもので、子どもが帰宅した時に、たいていいてやれない母親は73%。(図2)



### ③ 女子の方が寂しがる

帰宅した時に母親が不在の場合、「少し寂しい」に加え「ぜんぜん寂しくない」子どもは、男子で90%、女子で67%。全体として、思ったより子どもはタフなようであり、母親から自立しかけているようである。(図5)



### ④ 生きがいにならない仕事

母親の働くことの意味として、それが「生きがいになっている」と多少とも認めている子どもは男子で25%、女子で21%でしかない。「疲れる」仕事とみているのは、男子72%、女子79%。(図10)





## 5 母親のイメージは



母親のイメージは、働いていても専業主婦でも子どもにとっては大差がないようで、共に「忙しそう、疲れている、やさしい」などの形容詞が上位に並ぶ。わずかな違いとしては働く母親の方がやや「疲れている」(女子)、専業主婦の方がやや「やさしい」(男子・女子)、「怒りっぽい」(女子)、「趣味を楽しむ」(男子・女子)というところである。(図14)

## 6 仕事はやめなくてよい

働く母親に、「仕事をやめてもらいたい」とわりと強く思っている子どもは、男子で15%、女子で18%でしかない。思ったより母親の就労を、子どもたちは受け止めている様子が見られる。(図17)



## 提言

1. 母親不在に対しては、4年生以上になれば、ある程度それに耐えられる状態が生まれてきているようである。働く母親の問題は、それより幼い子どもにとって、時に真剣な対応が必要なものかもしれない。したがって、子どもが大きくなった後では、いたずらにこの問題に情緒的な反応を示す必要はないと考えてよいだろう。

2. とは言っても、母親不在に対する耐性には個人差がある。割合としては少なくとも、それに適応するだけの強さのない子どもに対

しては、きめ細かい対応が必要であろう。

3. 母親が、何のために仕事についているのか。どんな態度で仕事をしているのか。その結果が、家族の生活や社会にどの程度貢献するか。そうした条件によって、子どもが母親の働く姿を見つめる目は違ってくるようである。母親が働く場合は、少なくともこうした面で、働く意義を確信し、家族の目にもそれをわからせる努力が、共働きの成否の鍵を握るものとなるであろう。

サンプル数 (人)

学年\性	男子	女子	計
4年	443	429	872
5年	431	388	819
6年	248	231	479
計	1,122	1,048	2,170

### 調査概要

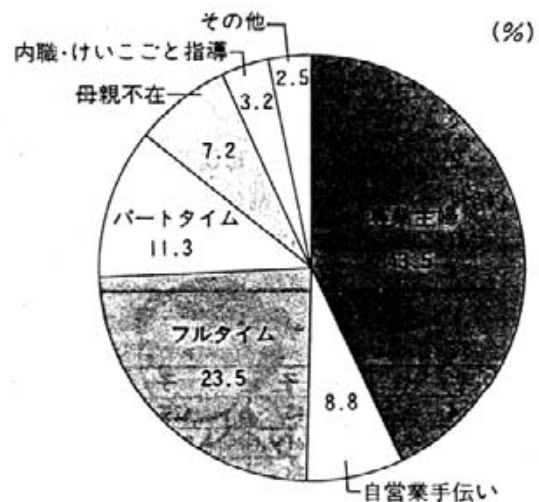
対象●東京都・千葉県・埼玉県の  
小学4・5・6年生 計2,170名  
時期●昭和57年5月  
方法●学校通しによる質問紙調査

## 1. 働くお母さん—その実像



このレポートは、働く母親の子どもたちが、「自分の母親の姿をどう受け止めているか」というテーマを扱おうとしている。したがって、働く母親の子どもを調査対象にすると同時に、専業主婦の子どもたちにも、比較のため、一部は共通に、また他で内容を違えて質問をしてある。対象とした小学4・5・6年生2,170名の母親の職業の有無は、図1のようになっている。専業主婦は44%で半数に達しない。フルタイムの仕事も24%とかなり多く、パートタイマーが11%、自営が9%、内職等が3%と、なかなかの数字である。ただしこれらはいずれも子どもの判断なので、フルタイムで働く者24%の中には、実際はパートとして雇用されている者も少なからず含まれているかもしれない。しかしいずれにせよ、かなりの割合の母親が職業を持って働いている様子を

図1・母親の職業の有無及び就労形態



は、改めて目を見張らされる。なおこのようにして得られたサンプル数は、働く母親の子

ども1,228名、専業主婦の子ども942名となっている。

## いつ出かけていつ帰るか

働く母親の一番の悩みは、子どもを置いて出勤(店に出る、農作業に出る等も含めて)しなければならない点にあると思われる。とくに、子どもが帰宅した時「おかえり」と言ってやれないことの罪悪感は、ほとんどすべての働く母親をとらえて放さないものではないだろうか。そのために有利な職を放棄して、自分で時間の都合がつけられる補助的な仕事に変わるケースも多いと聞く。

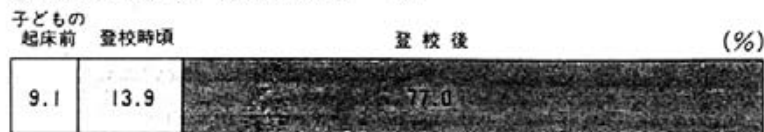
この点を見ようとしたのが図2である。まず出勤時刻を見ると、やはり子どもが目覚める前に出勤するのは9%とわずかで、残り91%の母親は、子どもの朝食の席にいるか、ま

たは少なくとも子どもと顔を合わせてから、出勤している様子である。図は省略したが、巻末の集計表を見ると、父親(ただし専業主婦の夫のケース)は3割が子どもの起床前に出勤してしまっているし、登校時刻頃に出かける父親も4割。つまり母親の場合は、父親と違って「子どもを送り出してから出勤できる仕事」を選択している様子がわかる。

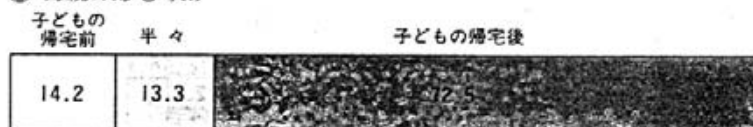
しかし図2-②に掲げたように、「子どもの帰宅時」にまでこの母親としての配慮は及ばないものようである。73%が、子どもの帰宅後に家へ帰って来ている。ここに働く母親の「おかえりと言ってやれない」悩みが生まれ

図2・母親の出勤・帰宅時刻

① 母親の出勤時刻 (働く母親のケース)\*



② 母親の帰宅時刻



\*以下とくに断らない場合は働く母親を持つ子どもの場合



るのであろう。

さらにこの点を追ってみよう。図3は、いわゆる「カギッ子」の可能性をみたものである。図2-②で見たように73%は母親の方が子どもより後に帰るわけだが、しかしそれは即「カギッ子」というわけではない。他の家族が代わりに「おかえり」と言ってやれる可能性もあるわけである。

図3が示すように、自分が帰った時、「たいてい誰もいない(カギッ子)」と答えたのはわずか38.4%。62%は「誰かはいる」と言ってい

る。図4がその内容である。母親でなくても誰か家族がいれば、子どもの気分はかなり和らげられるであろう。母親が、職業継続のために、夫や自分の両親との同居にふみ切るケースもあると聞く。

しかしそれでも図3・図4に添えた、母親が専業主婦のケースと比べると、当然ではあるが、子どものそばに「大切な人」がいない割合は大きい。いたずらに情緒的になってはいけないのだろうが、何か胸に迫ってくるものがあることは否めない。

図3・子どもが帰宅した時

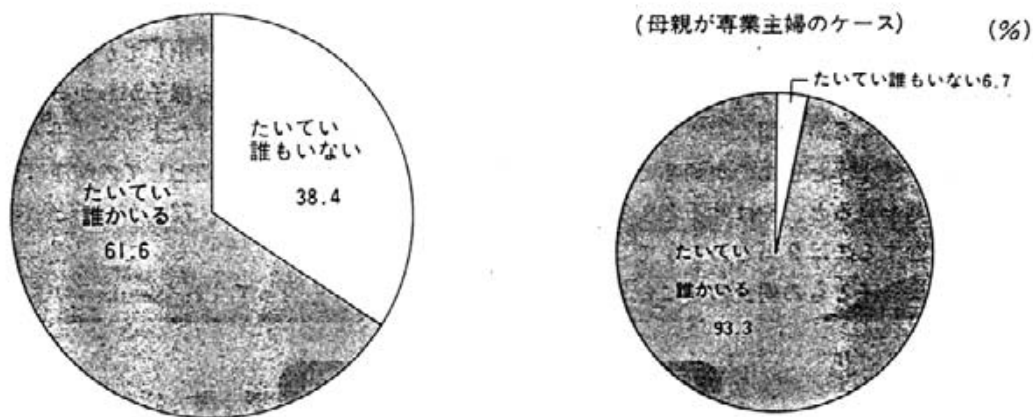
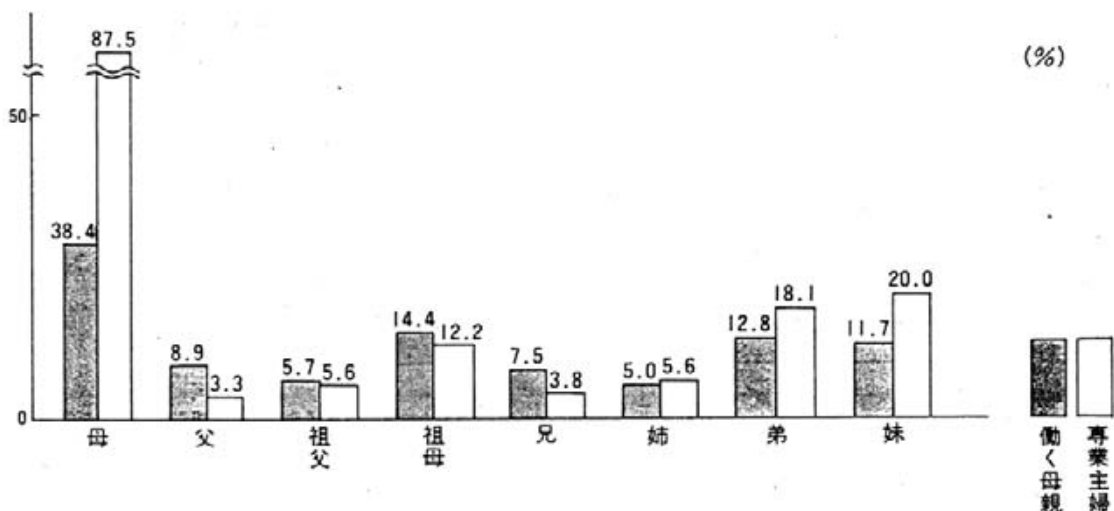


図4・子どもが帰宅した時家にいる人



## 母親がいない時の気持ち

では、この点をもっと掘り下げてみることにしよう。ズバリ子どもに、学校から帰った時、母親がいないとどんな気持ちかするか、寂しくてみじめな思いをしているのではないか、それともがまんできる程度の寂しさなのか、を尋ねてみた(図5-①)。

まず男子と女子ではかなり感じ方に差があることがわかる。男子の59%は母親不在でも「ぜんぜん寂しくない」と言っているが、女子はこれが26%である。男子の場合、これと「少し寂しい」を加えた者の割合は90%にも達するが、女子は67%でしかない。

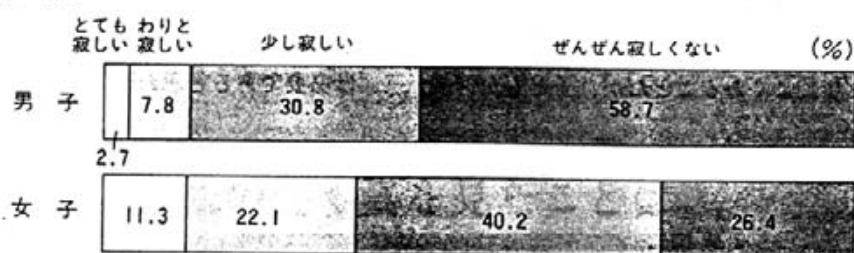
しかしそうした性差はあるものの、全体としては母親不在でも「少し寂しい」「ぜんぜん寂しくない」子どもが圧倒的であることに、驚かされる。小学校高学年ともなると、一人でいることに耐えられるだけの自我発達が見られ

ると言ってよいかもしれない。この点で学年差を見たのが図6である。「ぜんぜん寂しくない」子どもの割合は、働く母親の子どもの場合、41%、43%、46%と、わずかながら学年の上昇と共に増えていく。

もう一つ注目したいことがある。図5-②に掲げたように、ふだん母親の不在に慣れていない専業主婦の子どもたちの場合も結果はほぼ同じという点である。図6にもこの点は表れている。つまり母親の不在に対する受け止め方は、不在の経験に関わりなく、子どもたち一人ひとりの中に育つものではないか、ということである。つまり小学校4、5年生ともなれば、全体としては母親不在へのトランクスができ始める。しかし、一部には母親不在に耐えられない「寂しがり屋」もいる。そしてその割合は、いつも母親に「おかえり」と

図5・母親が不在の時の気持ち—学校から帰った時—

### ① 働く母親



### ② 専業主婦

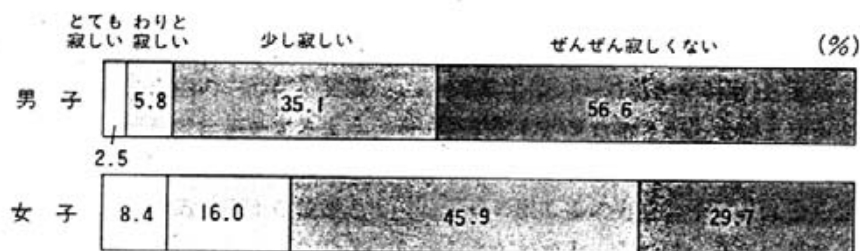
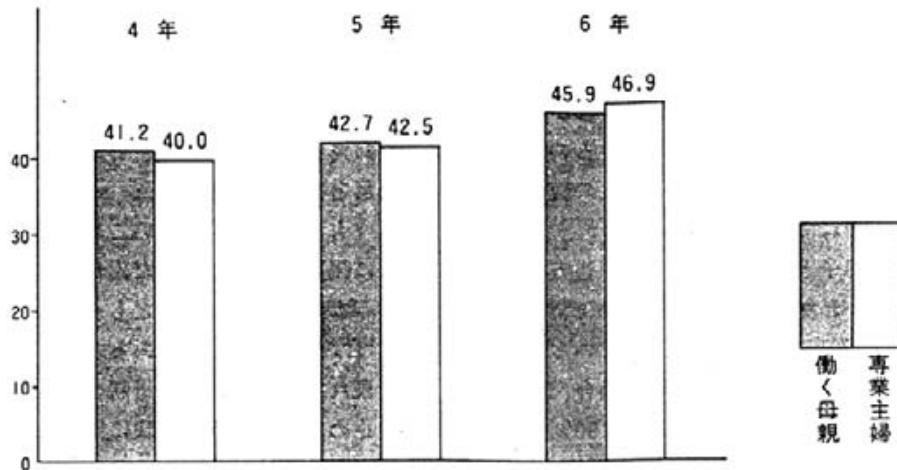


図6・母親が不在でも一ぜんぜん寂しくない子ども

(%)



言ってもらっている子どもたちでも、「カギッ子」であっても、大差はないということだ。逆に言えば、子どもは「寂しさ」に完全に慣れるということはないのだろう。

このように、子どもたちの中には、母親から比較的自立して、自分の世界を作り出せる能力の持ち主と、何かにつけてまだ母親を必要とするやや「甘えん坊」タイプがいるのだと考えることが妥当だろう。

つまり、よくあることだが、子どもが何歳

であろうと母親が働いていると聞けば、つい「可哀そうに、一人ぼっちで」と同情してしまう。しかし、これは情緒過剰な反応というべきなのであろう。しかし、と言ってそれでは4、5年生にもなれば、すべての子どもが母親不在に耐えられるかと言えば、そうではない。割合は少ないものの、母親不在に耐えられない子どももいるのであって、そうした一人ひとりへのきめ細かい対応が、共働きには必要であると思われる。



## 2. 働く母親のイメージ



人間は生きるために働く。しかし、子どもたちがそのことを十分に理解するようになるのは、かなり後になってからのように思われる。とくに父親と違って、母親の場合は、働い

ていない人びとの方が一般的なイメージであるから、その労働の意味の受け止め方が不十分であっても、不思議ではない気がする。では子どもたちはどうなのであろう。

### 母親の働く姿を見たことは

父親不在の現代と言われる。これは父親が子どもの前に精神的にも物理的にも不在であることの表現だが、その理由の一つに、父親が住居から遠く離れた場所で仕事をするようになったことが、指摘される。つまり父親が職業人として、社会の中である確かな位置と役割を持っている姿を、目のあたりにしたことがないことから、父親の「男らしさ」を確認

できないことによるのだろう。

この点について見たのが図7である。父親（専業主婦の夫の場合を引用）と母親の働く姿を子どもが見たことがあるかどうかを尋ねたものである。全体として、父親の働く姿より母親の働く姿の方を、子どもはよく見ていることがわかる。これは、さきに見たように母親が子どもや家庭との関係で、より近い（な

図7・親の働く姿を見ることは

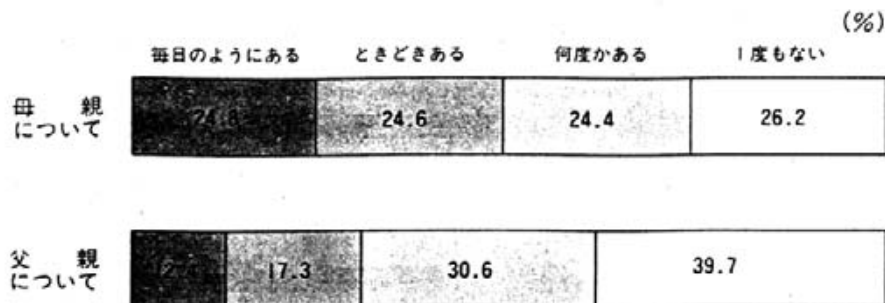
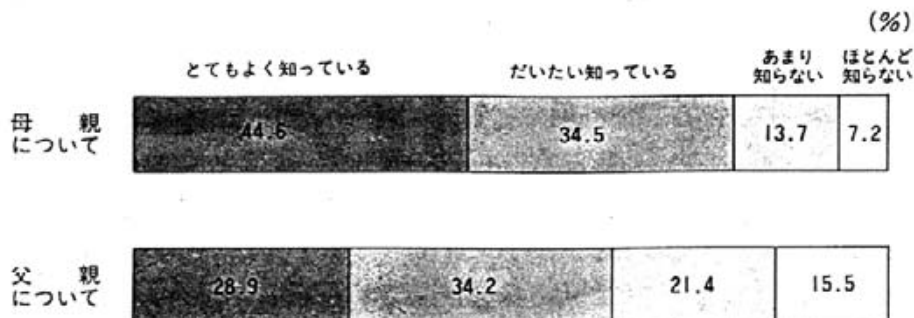


図8・親の仕事の内容を知っているか



るべく家庭を空ける時間が少なくてすむ)場所を選択していることによるものであろう。つまり子どもの生活圏内で働くため、母親の働く姿が子どもの目に触れ易いのであろう。

したがって図8にあるように、その仕事の内容も、父親の場合より、より具体的に把握されている。

## 母親の仕事のイメージ

さて、母親の働く姿に接して子どもたちはその姿をどう評価しているのであろうか。父親に比べれば、一般的には補助的で収入も低いと思われるが、子どもたちは母親の仕事を、一体どんなものにとらえ、また母親は何のために働いていると思っているのか。

図10に示したように、7つの形容詞を示し、その肯定率(とても・少しそう思う)を見てみると、①疲れる(男子72%、女子79%)②難し

い(58%、55%)③人のためになる(49%、51%)などのように、仕事の大変さを評価する語が上位を占め、かつその社会的意味も半分位の子どもたちから評価されている。

逆に子どもたちが評価しないのは「カッコいい」「生きがいになる」「楽しい」の側面である。つまり「見た目はよくないし、生きがいになるとか楽しいという性質のものではなさそうだし、たいした収入にもならないし、

疲れて難しい仕事だが、多少社会的な意味はある」という位の評価と言えるだろう。しかしこのことは、それだけ母親の働く姿にたいわりと同情の目（たいした仕事でないわりには難しくて疲れて大変だ。ご苦労さま。）を注いでいるということかもしれない。

さて図11は、これを父親の仕事のイメージと比較するために、男女別に作図してみたものである。全体として、母親より父親の方にほとんど、どの項目でも高い評価がされている。しかし評価の内容（疲れて難しいが、あまり楽しくもないし、生きがいにもならない）の点ではよく似ている。違いが見い出されるのは、「母親の仕事の方が父親より楽しそう」という点だけである。

図9・父親の職業

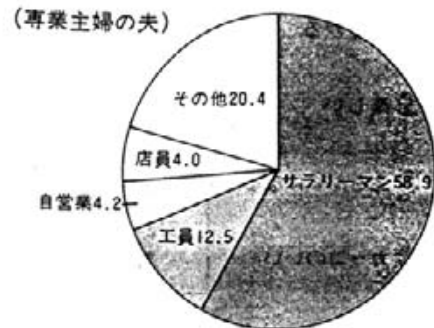
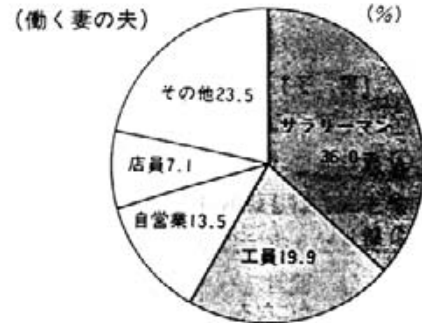


図10・母親の仕事のイメージ

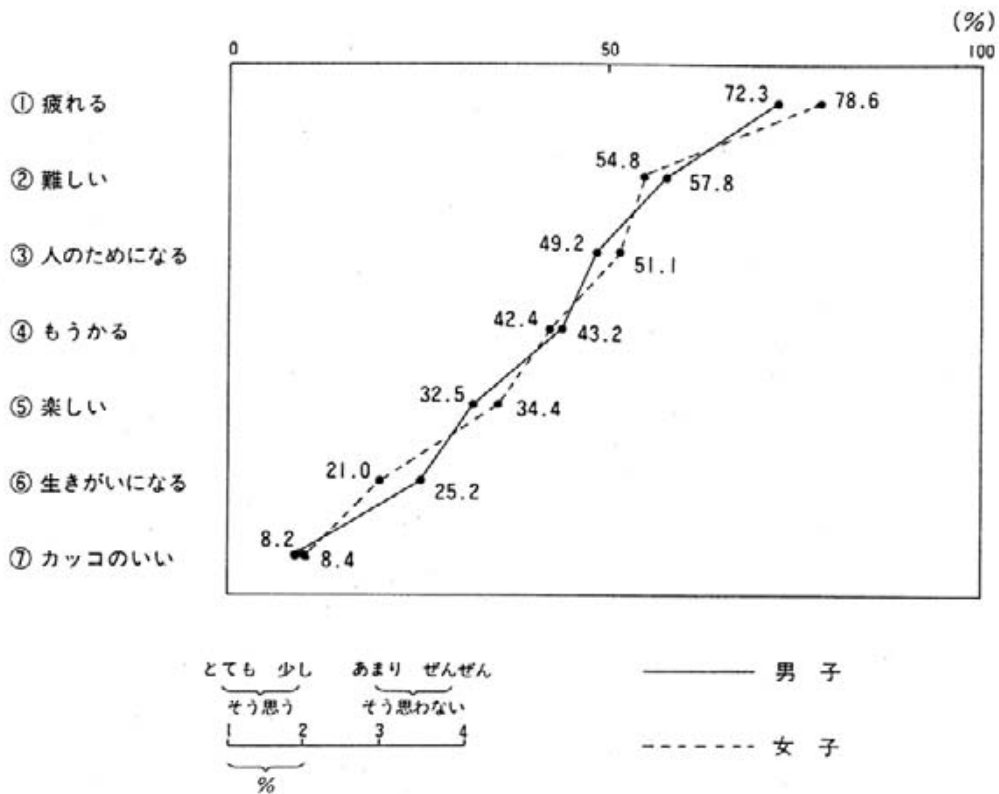
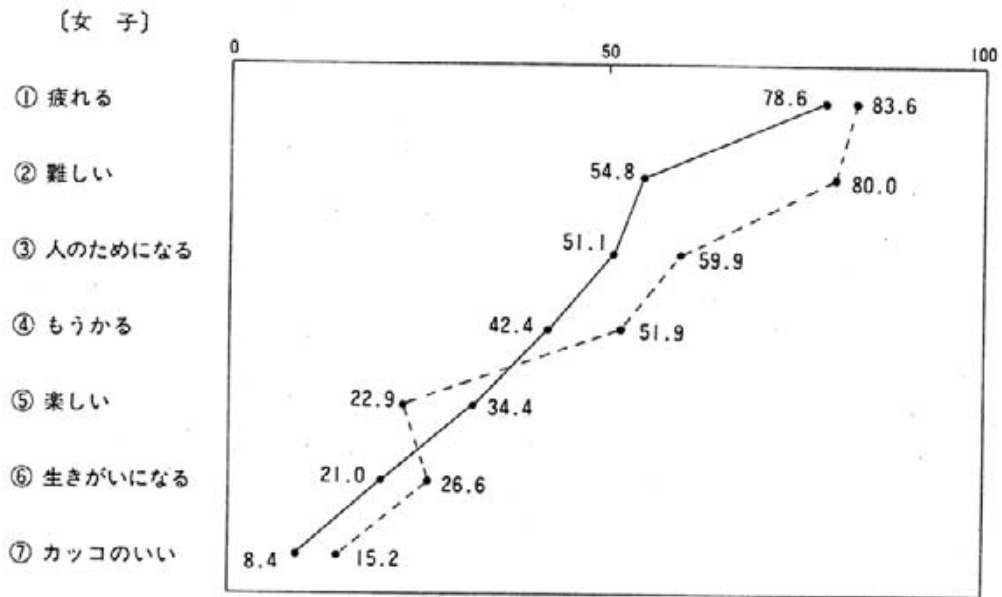
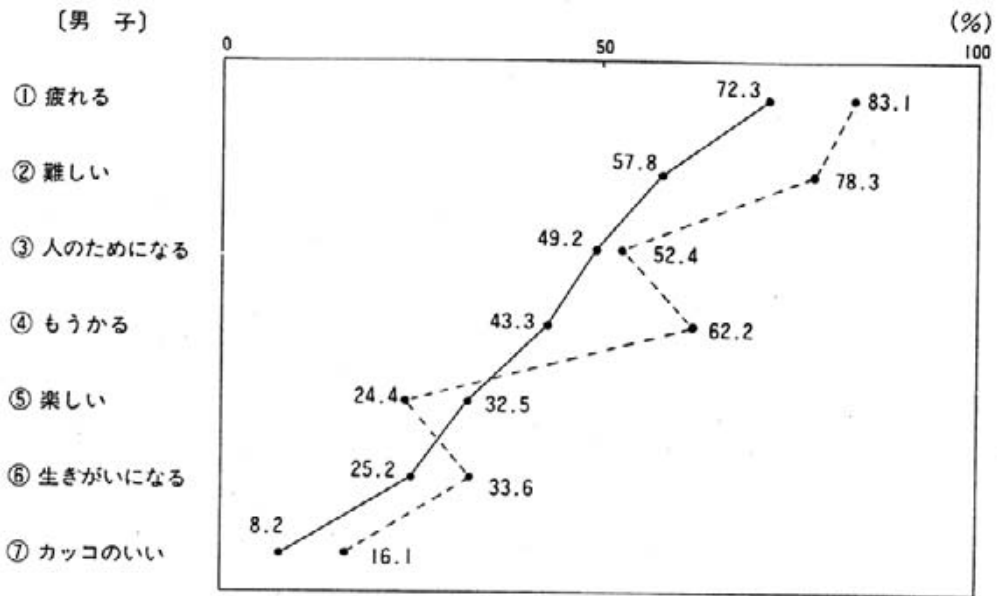




図11・父母の仕事のイメージ



とても 1    少し 2    あまり 3    ぜんぜん 4  
 と思う    そう思わない  
 %

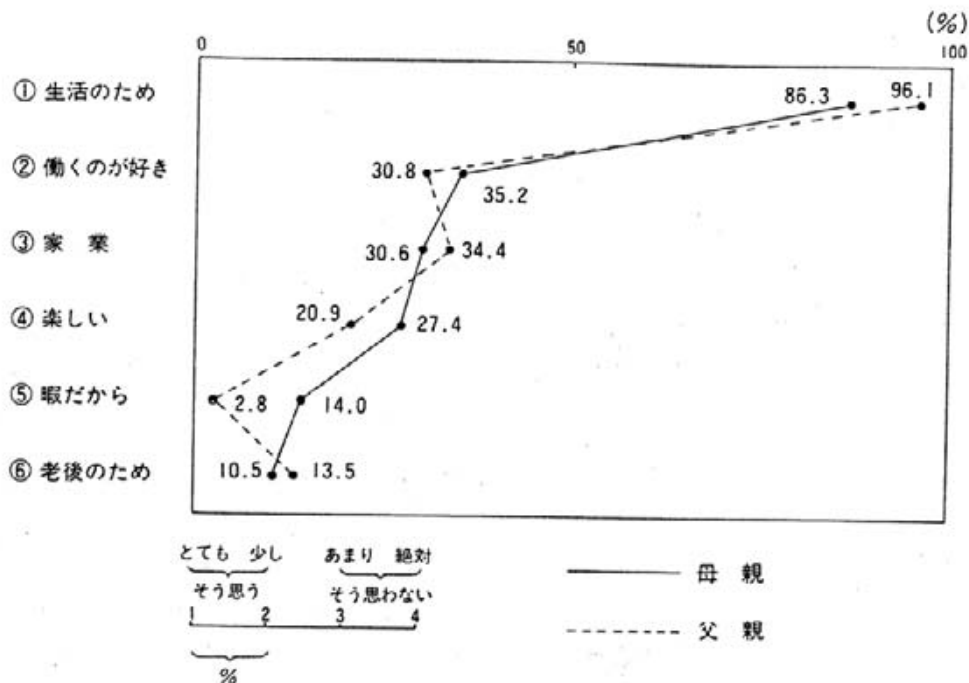
———— 母親  
 - - - - - 父親

## 何のために働くか

前項で見てきたような「疲れて難しくて、生きがいにはならない」仕事を、母親たちはなぜつづけるのか。図12で示したように子どもたちは、圧倒的な割合で「生活のため」と答えている。働くことが好きだとか、楽しいとか、暇だとか、老後のためとは、ほとんど判断されていない。日々の自分たちの生活を支えるため、ただそれだけのために母親が働い

ていると受け止めている。よい現実認識と云うべきであろう。そしておもしろいことに、父親の仕事についての評価もほとんど変わらない。少なくとも母親が働くことについて、子どもたちの目は暖かい。世間一般が働く母親に対して、ともすれば批判的な目を向けがちなのとは対照的であるとも言えよう。

図12・働く理由



## 家庭にいる時の母親

このように母親が仕事を持っていることに  
対して理解を示す子どもたちだが、ではその  
人柄についてはどう評価しているであろうか。  
われわれおとなは、「働く母親」に対しては、  
正直に言って必ずしも積極的なイメージを抱  
いていないのではないだろうか。疲れている  
とか、ギスギスした、自分勝手な、暖かみに欠  
けるなどというイメージが、ともすれば一般  
的なようにも思う。では子どもたちはどうか。  
図13にそれを男女別に示した。なお比較のた  
めに専業主婦の母親についても、結果を示し  
てある。

図が示すように、まず全体としては、働く  
母親も専業主婦の母親も、子どもたちからの評価  
はほとんど同一である。すなわち、働く母親  
も専業主婦の母親とほぼ同じイメージを持たれて  
いる。とくに女子はそうである（男子はやや  
専業主婦の母親への評価がポジティブである）。  
われわれはどちらかというところ、働く母親の方  
が「イキイキとしており、おしゃれで、しかも  
しっかりしている」というイメージを持た  
れているかのように思っていたが、そうでは  
ないらしい。考えてみると、今の専業主婦は、  
むしろ生活にゆとりがあり、経済的にも豊か  
で、めぐまれた層の人びと、ということである

のかもしれない。昔のぬかみそくさい女房、  
というイメージはなくなっているとも考えら  
れる。

おもしろいのは女子の方が、男子よりも、  
働く母親に対するイメージがよいことだ。自  
分たちの将来像と重ね合わせて評価している  
のかもしれない。

さて図14は、家にいる時の母親の印象であ  
る。男子も女子も母親は「忙しそうで、疲れ  
ているがやさしい」と評価している。ちまた  
では三食昼寝付き、などという言い方もされ  
ているようだが、子どもたちはまったくそう  
見ていない。テレビをよく見たり趣味を楽し  
む主婦像は、まだごく一部なのかもしれない。  
また全体としては、専業主婦と働く母親の評  
価は似た傾向を示すが、多少の違いは、次の  
点にある。男子は専業主婦の方がより「や  
さしく趣味を楽しむ」と見ており、また女子は、  
働く母親の方を専業主婦より「疲れている」  
と見ており、また専業主婦を「より怒りっ  
ぽい(情緒不安定)」と見ている。

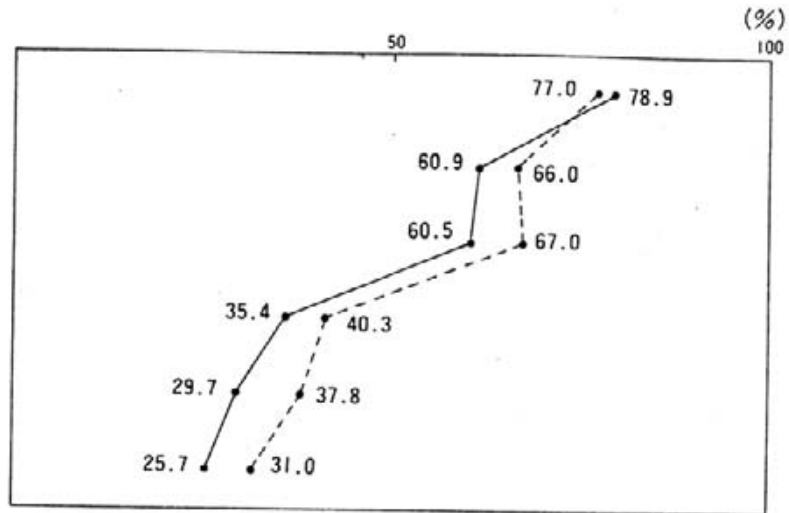
ともあれ、子どもたちにとっては、働いてい  
ようが家にいようが、母親への評価はほとん  
ど変わらずよいもの、と言えるかもしれない。



図13・母親のイメージ

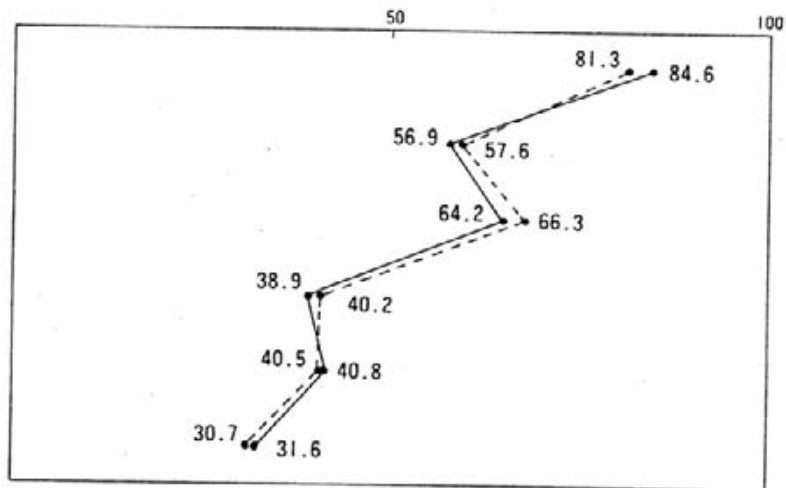
〔男子〕

- ① しっかりしている
- ② 頭がよい
- ③ イキイキしている
- ④ 若い
- ⑤ 美人
- ⑥ おしゃれ



〔女子〕

- ① しっかりしている
- ② 頭がよい
- ③ イキイキしている
- ④ 若い
- ⑤ 美人
- ⑥ おしゃれ

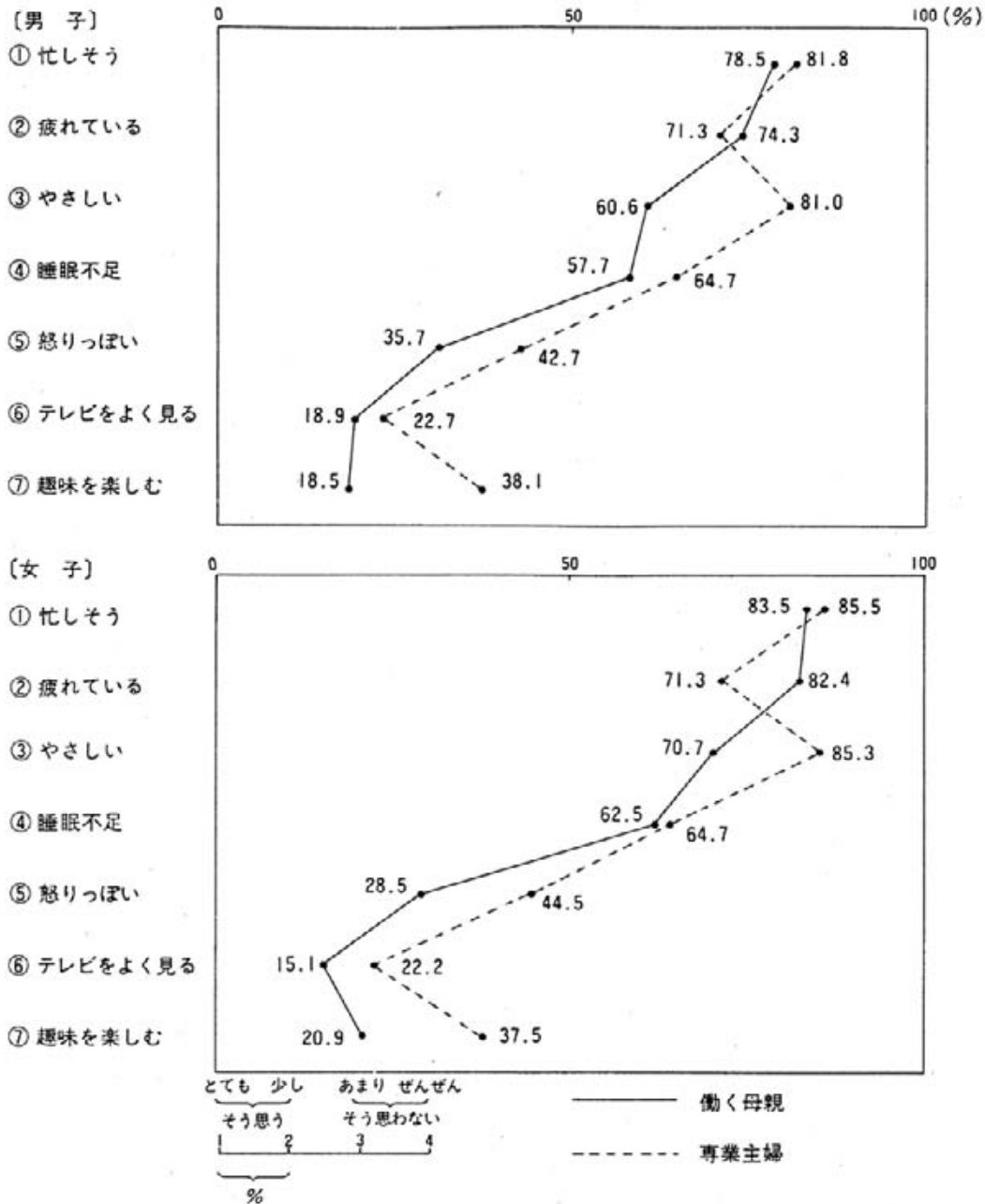


とても 2    少し 3    あまり 3    ぜんぜん 4  
 と思う    そう思わない  
 %

——— 働く母親  
 - - - 専業主婦



図14・家にいる時の母親の印象



## 父親の協力ぶり

さてそうした多忙な母親を、父親はどれほど支えているのであろうか(図15)。それが意外なことに、共働きでもそうでな

くとも、ほとんど変わらない様子なのだ。「とても手伝う」父親は1割に満たないし、「少し手伝う」父親を加えても、共働きで53%、

専業で49%。ほぼ半数でしかない。むしろ共働きと言っても、図1で見たようにフルタイムで働く者は半分だから、父親より労働量は少ない場合が多いとは思われるが、それにしても、この数字の少なさには首をかしげてしまう。面子やしきたりを越えて人間としての思いやりが妻に対してあったなら、当然この数字は共働きの場合、ずっと多くなるのではないだろうか。

さてもう一つ、父親の非協力ぶりからくるこうした共働きの多忙さの中で、母親たちは家事にどう関わっているのだろうか。子ども

の目からの評価である。

図16に示したように「お母さんは家のことに熱心でない」と批判的な目を向けている子どもは、働く母親の場合でも5%、専業で2%と僅少である。「ふつう」が半分、4~5割が「とても熱心」と評価していて、ここでも共働きと、専業との間に大差がない。この数字を見ていると、共働きの母親たちが多分無理をして家事にがんばっている様子が痛々しい気がするし、逆に専業の母親たちは、もう少し家事にがんばったらと言ってみたくもなる。

図15・父親は家事を手伝うか

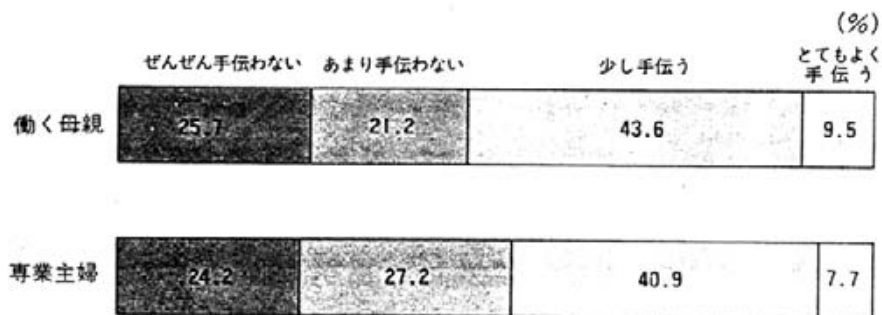


図16・母親は家事に熱心か

